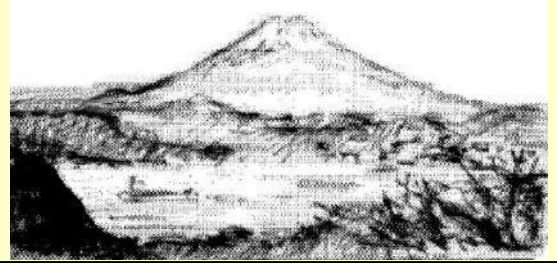


かけばし

昭島市立富士見丘小学校
校長だより No. 16

令和 3年 9月21日
稲垣 達也



今日は、中秋の名月。爽やかな季節となりました。おかげさまで、感染防止を基本とした新しい生活習慣もすっかり定着し、子供たちは欠席も少なく、笑顔いっぱいの学校生活を元気に過ごしています。

本校では、この緊急事態の方策を緩めることなく、同時に教育活動の一層の充実という、一見矛盾する学校の実現に向けた試行錯誤を繰り返しているところです。保護者の皆様には、私ども学校があたふたと展開する中、あたたかく見守っていただき、ご理解とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

社会では「家庭」、学校では「教室」が、子供の安全基地

さて、今年も実りの秋を迎えます。今は毎日登校し、授業を中心とした学びの場が多くあります。対面での先生や子供同士の学び合い、教え合いは、かけがえのない貴重な時間です。一生に一度の学校行事も、先週の3・6年生の校外学習に続き、八ヶ岳移動教室、運動会、音楽会等を予定しています。

コロナ禍においても‘先延ばし’的な思考を転換しました。子供の成長にとって、すべてが“今”、必要なことだからです。すべての人の命を守ることを最優先としつつ、英知を集結し、安全・安心な教育を進めることが不可欠です。そのために、感染防止とともに、絶対に欠かせないこと、それは…、『家庭や教室が、子供たちにとっての安全基地』になっていることです。



安全基地とは、

心の拠り所・心が快適に感じる空間 → 安心して帰る場所 のこと。

子供たちの安全基地は、社会では家庭であり、学校では教室です。これらの空間が安全基地として機能していると、子供は困ったことがあっても、不安になっても、自分の居場所に帰ることができます。

同時に、学校の教室は決して楽（らく）な場所ではありません。むしろ、子供たちを鍛える厳しい場所です。毎時間の授業は、子供たちの成長を促す「学びの場」であり、子供たちは失敗を乗り越え、楽しみながらも、力強く、繰り返し、問題解決に挑んでいます。

だからこそ、教員は、子供の心を惹きつける展開を工夫しながら、思いを込めて授業を
しており、まさに「心の拠り所」「心が快適に感じる魅力的な空間」を創出しています。

大事なことは、**[快適 = 楽（らく）]** ではないことです。

勘違いしないでください。楽（たの）しいと、楽（らく）とは、違います。

教室に「楽（らく）」を求めるようになると、教室から「学び」が消えます。

『学びのない教室は、もはや学校とはいえない』のです。



では… こんな時、あなただったらどうしますか？

(1) 子供が駄々をこねている

一見わがままに見えますが、小さな子にはよくある行動です。「自分の中にある欲求をうまく消化できない」「自分の全てをとにかく受け止めて欲しい」「他のことでストレスが溜まっている」など、心の葛藤が行動として表れているのです。

その向き合い方で親子の絆を紡いでいくこととなります。しっかりと腰を据えて、じっくり向き合うことが大事です。

その場限りの「じゃあ、今日だけは、〇〇してあげるね」は禁物です。



(2) 子供がつまずいて転んだ

目の前で、子供が転んだ時、「何やってんだ！」と叱責しますか？ 「頑張って自分で立ち上がりなさい」と激励しますか？ それとも「大丈夫？」と言って手を差し伸べますか？

では、私たち大人が、仕事で失敗した時に、どうしますか？ どうしてほしいですか？

ましてや、相手は発達途上の子供です。**ぜひ、無条件で「大丈夫？」と声を掛けてあげてください。**

それは、‘甘やかし’ではありません。



この2つは、どう違うのでしょうか？

木を見て、森を見ず

私が本校に着任して、1年半が経とうとしています。はじめに目にしたのは、「心の葛藤をうまく消化できず、駄々をこねている子供たち」の多さと、「つまずいて困っている子供たち」の姿でした。多くの教員が「駄々こね」に翻弄されつつ、保健室や会議室も使って「つまずいて困っている子」にも丁寧に寄り添っていました。しかし半年しても、「ぼくも、ぼくも…」「私も、私も…」と、教室以外に自分の居場所を求める子供たちが、むしろ増えていき、多い日は10人近くにもなりました。それは、**教室の居心地が悪いのではなく、個を大切にあまり、教室以外に居心地のよい場所を作ってきた学校の責任** でした。

まさに、「木を見て森を見ず」だったのです。

それ以降、個別対応も重視しつつ、子供たちを徹底して教室に戻しました。するとどうでしょう、やはり子供たちにとって、教室が一番なのです。教室こそが、一番の安全基地なのです。現在、とても落ち着いた雰囲気、子供たちが楽しい学校生活を過ごしているのは、こうした教員集団の子供たちを惹きつける授業づくり、学級づくりの賜物にほかなりません。

今後もこの姿勢を崩すことなく、「**教室こそが一番！**」の魅力ある学校経営を大切に参ります。



「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実

そのような中、新学習指導要領に基づいた子供たちの資質・能力の育成に向けて、ICTを最大限活用するなど、これまで以上に「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められています。



この2つも前述のように相反する概念ではなく、欠くことのできない「車の両輪」であり、社会の変化を前向きに受け止め、**生涯にわたって能動的に学び続けるための基盤を育成していくもの**です。

【個別最適な学び】

ハイブリット授業

【協働的な学び】

- 学習者の特性や学習進度、学習到達度などに応じ、指導方法・教材や学習時間などの柔軟な提供や設定。
- 自らの学習状況を把握し、学習の進め方について工夫し、調整しながら粘り強く取り組む。
- 興味関心に応じた課題の設定、情報の収集、整理、分析、まとめ、表現等、主体的に学習を最適化。



- 同じ空間で時間をともにすることで感覚を働かせながらお互いを刺激し合う。
- 様々な場面でリアルな体験を通して共に学ぶ。
- 同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや他の学校の子供たちとの学び合い。

学習履歴等を活用したきめ細かい指導の充実

オンライン授業

多様な学びを生み出す指導の充実



※本資料は、「教育課程部会における審議のまとめ」（令和3年1月25日中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会）に基づき、概念を簡略化し図等として整理したものと